魂の生きかえる道

この体の中は今でいうオンラインシステムのようになっているらしい。あらゆる心的情報も肉体的情報も頭脳中枢に集まってきて、何がどうなるのか分からないが、いろいろとアクセスし合って、自分の無意識世界で絶え間なく作動している。そして、その情報がはっきりと頭のてっぺんまで昇り上がってくるし、また思ったりすることは、外に向けて能動的にアクセスされてどこかに飛んで行くらしいし、そこで出会ったこちらの思いがあちらに何かを感じさせるらしい。それも、時間も無く、距離感も無く心的雰囲気が同調意識レベルの時にあちら側の心の窓を開けさせる。すなわち、その人の意識をつき動かすのである。

この五臓六腑の五体はコンピューターになっていて、それも、ちゃんと統括する本部があって、こちらで受ける受動情報をより効率よくコンピューター本部で仕分けをして

アクセスしてくれる。すなわち、いのちというライフコンピューターはオンラインシステムになっているのだ。

こちらから発する能動的心も、逆に、あちらから発せられた受動的意識波動も、それらのアクセス機能がオンラインシステムによって素早く判別され、スイッチのＯＮ・ＯＦＦに接続されていると思われる。

このいのちの中は、元々外界の全てに光で接続されていて、精神的には記憶再生機能が働き、物質的には生体再生機能が働いていて、五臓六腑を生成する。

共時性現象が起きる原因は何もかも外界にその因子があると思いがちであるが、「外は内なり、内は外なり」で、全てその因子は、この自分のいのちの中で起きていることを認識できるものだと、私は考えをそこにおいている。

いのちの聖火ランナーである私たちは、宇宙創成以来の連綿たる一切の情報を引き継いできた。それは内なるこのいのちが、それらの歴史的全てを掌握している事実が土台となっているから、無いものは無い世界なのだ。いわばこのいのちの中は魂の博物館といったらいいのかもしれない。

生命コンピューターは、外界情報の一切に対してアクセスをやり遂げているが、その

統御機能はすぐれもので、情報の扉を一気に開いたら魂の洪水となり生きてはいられまい。それで、情報の一切を受動的にもまた、能動的にもアクセスして、オンラインシステムによって判別仕訳をし、必要最小限の情報を、閃きや、夢や、表層的思念に転化して接続してくれていると思うのだ。その結果としての出会いがあり、縁結びがあると考えることで、私の意識の中では一つの整合性ができてくる。

「内は外なり、外は内なり」を信条とする私の中では、受動する情報についてはつねにそのアクセスするタイミングを見ているし、それは共振共鳴のタイミングのスイッチがＯＮになったりＯＦＦになったりしているとでもいえようか。

いのちは宇宙に結ばれている。だからいのちの中は宇宙のオンラインシステムによって自動調整されていると考えられるし、そしていのちの中は万物万霊にアクセスできるようになっていて、それが共振共鳴次元まで達する魂のひびきであればこそ、縁結びという、時を同じくする共時性現象化となって浮上するのかもしれない。

あらゆる生命体のどのような心霊体にせよ、思ったり考えたりする心が、いのちの光に点火するには、その原点が自分の原始組成単位である原子の意志的反応次元と考えてみれば、この世での離合集散の出会いの縁のメカニズムがうっすらであっても心象できるのではないだろうか。

今では、物理学の世界は原子のさらなる物質（素粒子・光子）と無の解明に向けて進められている。難しい学問の世界は分からないが、何しろ私は、共時性現象を体験してきたことから、究極の無の世界では、精神的、物質的な両極を超えた一元一体二象体といういのち本来の〝意志性〟こそ、この世の縁結びの謎解きのように思えてならない。

自分といういのちの原子組成は、毎日摂取する食物の原子によって成り立っている。それを思えば、いのちと食は同義であって当然だし、そもそも自分は原始的にも意志性の生体であったと思うに何らの不思議はない。それを思う時、極端ではあるが、毎日の食こそが出会いや縁結びなどの中枢であることになる。

草木や虫などあらゆる生物や、あらゆる存在群とこの自分とは、原子の心性波動によって結ばれているものだ。決して離れたものではない。それを成し遂げてくれているのが原子であり、その土台の基礎となっているのが毎日の食なのである。だからこそ、心と心のアクセス切符の発行所は毎日の食に依拠しているといえるし、原子には宇宙に通じる共通語的文字・数・色のサイクルが組み込まれているのではないか。とくに数霊こそは、宇宙意志性のシンボル的存在ではないかと思っている。

生から死までの中で、数限りなく心を生み続けた人生。心は目に見えない霊魂の世界をつくり、共振共鳴の反応によって、ほかとその心を共有する。死する者の魂の蓄積によって、人の世を、良きにつけ悪しきにつけ築き上げてきた。いのちの光に巻き付くようにして、それぞれの生物の肉体生命に寄宿する霊体となって、心は生き続けている。それは、遺伝子性の実体となり、また物言う霊体となって肉体生命に寄宿してのみ生き続けられる運命として、我々の心となって蓄積される。

肉体を脱した死者の心の霊体は、あらゆる霊脈のネットワークを通しての心波を共有できる肉体生命の中で、自在に生き続けることができるし、それが魂の実態ではないのか。その霊魂の生きられる世界こそ、時空なき自在無限の世界と考えられる。

肉体生命は、巨大な記憶素子を積まれている記憶体であり、脳という基本ソフトを備え、宇宙というハードウエアの中で、各自の生命コンピューターは万物にわたるネットワークを持ち、共振共鳴してソフトを開き、霊魂のコミュニケーションがひびき合う。そして、いのちのネットワークの中でソフトを開いた者には、その姿や言語のひびきを結ぶことができるというものだ。

科学技術は、インターネットで結ぶネットワークの世界で、その情報共有は、ほんの秒単位で可能になっている。だがその人間の科学力でさえ、この宇宙生命界における一片の応用にすぎない。

生命界のハードの中で、各生命体に組み込まれている生命コンピューターは、莫大な数のソフトで駆使できるようになっている。そして、その情報は秒単位、否、それ以上に早く共有できるはずではないのか。ついそんな思いに立って心や霊魂の世界を考えてしまうのである。

生命コンピューター回路が開かれているなら、何といってもこのいのちのコンピューターは、地球経由の宇宙に直結しているすぐれものだし、どんなに多種多様化されていても、その記憶メディア（脳など）がある限り、種の肉体存続ある限り、死んでも生きて通わす身のさだめということができる。パソコンでいう基本ソフト（OS）や、アプリケーションといわれるソフトにしても、ネット接続のプロバイダ（接続業者）なども不要であり、自分の霊的ソフトが開いてさえおればいいわけで、強いていうなら出会いの縁が一種の接続代理ということができよう。共振共鳴共時の現象に関心をもつ心になればこそ、それに近づけると思っている。

ではここから魂不滅のファイルを開いてみることにする。

それは、平成元（一九八九）年五月四日木曜日。旅の途中で横浜からH市に移動したときのことであった。

昭和天皇の御陵である武蔵野陵に参拝するために出向いたのであるが、崩御なされたのが一月七日であるから、山陵完成まで一般参拝ができなくなっていた。それを知って、やむなくその夜は二重橋のたもとにある河川敷に駐車して一夜を過ごすことになった。

前の晩、やりきれないほどの眠気で早々に休んでいたせいもあったのか、夜明けにはまだ早い三時二三分、星がきらめく夜空の中で目覚めてしまったのである。まずノートを取りだし、ハンドルをテーブルにして時間をかけて記録を済ましてから外へ出た。土の上にカーペットを敷き、ヨガ行と瞑想の行程を一通り終了したのは七時五八分のこと。そのまま車に戻り、洗面と山陵の遙拝も終え、さて出発するかと思ったその時のことである。ドアの外からノックをする人がいた。のぞくように見入る一人の男性が、ガラス越しに声をかけてきた。窓を開けると開口一番、

「夕べ暑くなかったか」

と聞いてきたのだ。それは言われるとおりであったから「すごく暑い夜でしたよ」と言うと「そうだろう」と意味深長なことを言い、さらに続けて、「暮れに、この橋の下で

若い女性が焼身……という事件があったのだよ」と言うのだ。えっ、と一瞬張り詰めるものがあったが、陽も昇る白昼のこと、夕べのうちに言われたのであればどうであったろうか、あるいはどこかに移動していたかもしれないが、「はあ…そうなんですか」と、それ以上は続けずに、これから次に進むこともあってそれはそのまま受け入れるしかない。心は全く動くことはなかった。

彼は、そのことを知らせるために声をかけたのではなかった。こちらの挙動というか、この場所でカーペットを敷いてヨガ行をやりだしたのが気掛かりであるばかりか、その場所は、彼自身の心身修練の行を一〇年以上にわたって続けてきた魂の入っている場所であるというのだ。そして、ぜひにと言われお宅に招かれることになり、この旅では決して人家に逗留せずと心に留めていたが、誠意にほだされてこの日は昼食までご一緒の夢中の五時

間を過ごし、羽目を外してのお世話を受けたのである。奥様には、柏餅とお茶で迎えられ、今も温かく記憶に残っている。お互い素性を明かしてみて、N夫妻であることを知り、さらに同年代と分かり、敬服至極の境地で尊い時間を過ごさせていただいた。あれからはや二〇年が過ぎている。

N宅を出たのは二時五分のことであり、行く当てもない旅の中で、車は一路国道二〇号線を西へと進めていた。交通量も次第にまばらとなり、名も知らぬ峠道へと上って行く。山道はすごく気分のよいもので、新緑に映える自然の気を体一杯に吸いながら行くと、相模湖の看板が時々目にちらつく。湖もいいものだなあ、今夜の車泊は相模湖畔あたりとするか、と思いつつ峠を登りつめた頃、そこに古風な一枚の温泉看板が立っていた。その看板を発見すると私は、迷わずそこを右折した。山峡深く細く曲がりくねった登りの山道であった。家を出てから半月にもなった五月五日のことで、銭湯入浴もいいかなと思った。国道からおおよそ一〇キロ位入ってようやく宿にたどり着いたのは午後の三時半頃であり、日差しも強く静かな日であった。

玄関に入り声をかけると奥の方から主人が現れてきた。軽く会釈をしてから伺ってみた。

「泊まりではなく入浴なのですがお願いできますか」

と尋ねると

「うちは鉱泉なので夕刻にならないと入浴できないのです」

と主人は言う。「ああ、そうですかわかりました」と言って主人と目を合わせた、その時である。

「アリガトウ　ワタシハココニトマリマス」

とはっきりとした声で、女性が後ろから声をかけたのである。あれ、誰もいないはずなのにいつ入ってきたんであろうかと振り向いた一瞬、全身霊気で包まれた。前には宿の主人が立っているが、それも真昼の中で外は青天白日の明るさだ。誰一人も後ろにはいない。ましてや女性の声だ。その時再び全身に霊気が昇り上がった。すぐにあの橋の下の女性だと思った。「夕べ暑くなかったか」と聞かれたあの話である。そしてそう思った時、私の全身から何かが抜けた感じになっていた。

あの女性の霊魂が、ここまで車で同行していたのだと思った。そしてそれは事実であり、内なる女性のはっきりとした声は、安堵に満ちて、感謝の思いさえ伝わる深い思念の中から湧き出た声であった。たとえ肉体から脱した魂でも、限りない執着から真の命

の光に飛び立ちたい思いでいたことか。その思いが、共振共鳴できる方との出会いの縁で、女性の魂は天上界に成仏出来るのであろうと心が引き締まる思いになった。

宿の主人と二人の話はごく現実の受け答えの会話なのに、私のしぐさと挙動を目にしてどのように映ったことであろうか。ご主人は、奇異変人に私を見たであろうか。

それでは、と失礼して外へ出た。言い知れぬほどに晴れ晴れとして、身も心も爽快感に包まれながら、私はゆるい下りの山道を国道に向けて降りて行く。

タイガー計算機に秘めた魂

どうか安らかに永眠して下さいと、追悼の意を申し述べるが、それで亡き本人が本当に永眠することができるのか。死んだらどうなるのか、本当に何もかもゼロになるのか、消えて無くなるというのか。

ましてや疲れ果てた人生なら、誰しも永眠させてやりたいのが人情というものであろうが、どうもそうはいかないのが現実というものである。

死んでも生きている心であり、魂であり、そして肉体は確かに煙となる。残るはわずかの白骨それだけだ。ところが、亡き人の心はれっきとしてこの世に残る。どこにどうして残るかといえば、この世のわれわれのいのちの中で立派に生きている現実がある。

それまでの、物質性の生体機能（肉体）は煙となって消えこそするが、それはたんに目に見えない生命元素（原子）となって天地に還元した結果であり、それまでの人生で

蓄積された心と、引き継いできた遺伝子性の霊魂（心）は、この世に厳然として残る。

それは、いのちのネットワークに乗って、すなわち人々の共振共鳴の霊脈の世界で、その居心地に合わせて寄り添いつつ、自らの魂を再生エネルギーに姿を変えるのである。

いわば、死んだらその心は、類似波動の心の磁場に再生エネルギー化するといってもいいかもしれない。

生命本体の生命エネルギーは死とともに天地に還元するが、いのちとともに育った心の磁場（魂）は、この世に心の生命体となって、心の再生化を果たすものと考えてもいいのだ。それは遺伝子性の霊脈を通じて、また共振共鳴の縁者に結ぶ霊脈の復活再生によって、亡き魂は再生エネルギー化を果たすものと考えている。

ここで少々自分のことを開陳して、この話の参考にしていただければと思う。昭和六一（一九八六）年から、私の人生はガラリと一転した。これまでの人生から意識改革をするため、それなりに独自の修行体験をしたのであるが、その発端は酒乱人生からの脱出であり、祖霊からの魂の浄化修行であった。その内容たるや、まさしく狂乱状態になっての、自己の魂との格闘といってもいい。

心の中というのは、古い古い歴代の、それはそれは霊光霊脈のすさまじい絡み合いの世界でもあった。自分の中の霊体をつぎつぎ浮き上がらせての格闘である。激しい呼吸法もあって、時には血管怒張によって血管が破れて出血するというほど、これまでの自分の不幸性霊魂との決別のためであった。それでも中に居座った心というものは消えようとはしないのであった。神社の前で「すまない、汚れた心を許して下さい」と念ずれば、「バカナコトイウナ」と、いのちの底から叫び出すという体験は、数年にわたって起きている。生命体の中には善悪二相の魂がたむろしていることを知ったのである。

歳月を重ねるごとに、そんな悪性には負けじと、善性の心を積むしかないと自覚して、心の輝きを積む日々が続いてきた。あれから二三年が過ぎた。七四歳となり、平常心にかえってみれば、このいのちというものは、生きている今ここしかなく、中は全て自分の過去と、死者たちの魂の再生の世界であり、死者は、死んでも永眠などするわけもなく、この今の私の心に生きようとして、働きかけていることがわかった。

死者からの、善性の働きかけならこれほどいいことはないのであって、その逆の悪性の働きかけこそいい災難というものである。この身の中は、まるまる死者の魂以外の何者でもない。

歴代累々からみれば、この世に生きた自分の人生でつくりあげた心なんて知れたもの

である。いいにつけ悪いにつけ、自分が思い続ける心にふさわしいあの世の魂がダイレクトで再生するということは嘘ではない。いうなれば、この世は亡き霊魂のるつぼともいえるのだ。今のこの心に何もかも付いて回る仕組みになっているのだ。今の自分の心に共振共鳴して、亡き霊魂は生きようとしているのである。

この亡き魂の再生のメカニズムは、今の自分の心の中で再生するほかはない。また、その共振共鳴の魂のチャンネルさえ合えば、出会いの縁一切においても、次々かけよってくる霊魂の世界であることは知っておいたほうがよい。だからこの自分というのは、万霊万魂にアクセスできる媒体（メディア）の役目も果たすのである。

〝縁は異なもの味なもの〟

〝袖振り合うも多生の縁〟

などという諺は言い得て妙ではないか。

科学界では、こうした亡霊の話はタブーであろうが、現今はだいぶ科学者の間でも関心が高まっているのではないかと思われる。世界に名を馳せた、スイスの心理学者で精神医学者であるC・G・ユング博士（一八七五年七月二六日～一九六一年六月六日没享年八五歳）は、共時性現象（シンクロニシティー）といわれる概念の仮説をたてて探求なされた臨床医であるが、世に言う偶然の一致について、学問的探求のメスを斯界で初めて共時性現象としてとらえている。

博士は、深層意識世界と自然界の生命根源に根差す物心両性からの大調和力を探求なされたのではないかと、私なりに考えている。意味のある偶然の一致と意味のない偶然の一致とを区別され、魂の共振・共鳴・共時を探求なされたのではないか。思うに、学問的に探求なされたことは、人の心と運命をひもとく、一元性を証すことではなかったか。〝心は運命を支配する〟という、その根源を明かさんとしたのではないかと思ってみた。

さてこれから述べる、偶然を寄せ付けない一見無関係と思われる出来事、つまり共振共鳴の共時性現象を、二〇年の時空を越えて体験したことについて、皆さんはどのように思われるであろうか。

今から二〇年前のこと、旅の途中で函館山に立ち寄ってみた。東に立待岬をのぞみ、少し登り上がったところに今は観光名所となっている石川啄木の墓がある。それは、平成元（一九八九）年五月二五日の晴れて温かい昼下がりであった。

ここで出会うも奇遇なり、あの世とこの世の彼岸橋の上で商売をするご仁に出会った

のであった。赤銅色に焼き上がった顔の肌をした四、五〇代の風人墨客ともいえるご仁だ。

石川啄木の墓に隣接する広々とした三軒ほどの墓前に、所狭しと額物が雑然と置かれていた。東海の小島の磯の……〟で始まる啄木の句もあって、額面三〇〇〇円と値がついていた。ハガキ風の書画もあれば、商標登録したというカニ印のTシャツまで並んでいた。

観光客は、啄木の墓に一礼して、隣を見れば足を止めて客人となってくれる。私は客のいない時をみはからい声をかけてみた。夏の観光シーズン中に、こうして店を出し、暮らしの一年分は稼ぐのだという。相坂春山という雅号をもっていて、画家、書家、そして作詞にまでも手を広げている多才なご仁であった。

津軽生まれの津軽育ちであるといい、農業共済組合にも籍を置いていたことがあり、種付師の免許を持っているという実にユニークなご仁である。それにもまして、タイガー計算機の修理専門員であったというのだ。汽車とバスを乗り継いでの旅回りで、旅館泊まりの日々を長い間続けていたともいう。

タイガー計算機と聞いて、私も若い頃農協職員であったから、当時タイガー計算機を毎日回し続けていたことを思い出していた。

ところでこのご仁は、

「他人に使われるんなら乞食でもしたほうがましだ。俺は勤めが嫌いでどうにもならなかった」

と言う。

「雨の日は休むし、食って飲んでちょんであれば上出来であるよ」

と言い置いて、目の前のTシャツを両手で開いて、

「Tシャツのこのカニ印は商標登録されて独占であるよ」

という。また

「函館にきて一一年ほどだが、ここ（啄木の墓）に通って四年になる。ここには函館

の人間は誰ひとりもこないし、客は観光客だからやりやすいんだよ」
と言い置いて、
「青森も、秋田も、岩手の人間も買ってはくれない…こまいんだなあ」
と、なぜかこちらの山形はその中に入ってはいなかった。そして、いい時も悪い時も人間誰しもあることだ、そこの海の潮でも引いたり満ちたりという風に、さっとさりげなく視線を海に向けた。
ご仁は泰然自若の自由人である。だが芸術家タイプ独特の鋭い眼光で、客人を一瞥する。「お客さん」と一声、啄木の墓前で記念写真をとる若夫婦に声を飛ばした。
「お客さん、写真だけ撮って拝まなけりゃ駄目だよ」
と、心中の憤り丸出しで本気で忠告する。その姿に、別人の魂を見た。メリハリある迫力に、客人は平身低頭して墓に手を合わせてそそくさとそこを立ち去って行くかと思うと、次に立ち寄った高校生風の四、五人連れには、一変して実に優しく忠言するのであった。
「墓で写真を撮る時は足を切ったら駄目です。駄目、駄目だ。全部写さにゃいかん。そら…それでは写らんぞ」

と、こまごまと観察して言い続けていた。
一見芒洋としているが、芸術家タイプの人というのはみなそういう心の窓を持っているようだ。描く、書くというのは心の底を見ていて描くのであろう。相手の心にピントを合わせて鋭く射貫くのである。
私はくだけた話で声をかけた。
「さきほど飲んで食ってちょんであればいいんだと言ったが酒をやるんですか」
と聞くと、御仁いわく
「酒は飲まんです。お茶とお菓子があればいいんだよ、好きですなあ」
と、歯をむきだしてニコリとほころぶ。
前を通るタクシーの運転手たちは、なぜかここの前で徐行してご仁に会釈をするのだ。ご仁も愛嬌たっぷりに笑顔で返す。ともに、函館山観光でうるおう同業

意識なのかもしれない。

ご仁の言うには、以前、テレビ取材を受けたのだという。昼のワイドショーのロケ撮りに応じて、一時間半ほどで三万円のギャラをいただいたというなかなかの人気らしい。

「この角印を押せば一〇万円以上になるんだよ、丸印の色紙なら二〇〇〇円でもいいんだが」と言って、書画に印をする角形の落款（らっかん）を見せてから、美術年鑑にも出ているというご仁なのであった。

「旅に来てその土地の人々と話をせんだったら、観光に来てもなんも残らんもんだよ。印象がないというもんだよ」

と、心に熱いものをもっているご仁は、ヘビースモーカーでもあった。次々とタバコをすって大丈夫なんだろうかと、人ごとではなかった。肺の中が真っ黒なんじゃないかと、いらぬ気を回した。

店じまいには、大事なものだけを自転車で持ち帰り、

「なくなってもいいもんだけを墓のうしろに置いて置くんだよ。アッハッハー」

と、屈託なく笑っていた。つづけて御仁は

「金がいくらあったとて、そんなのいくらも続かんもんじゃよ。無くてもどうっちゅうこともない」

と、他人に使われる位なら乞食のほうがましだ、と言い切る悟境の人生を飄々と生きるご仁。

向こう三軒両隣の墓を店がわりにして、死人の魂を助手につけて生き抜くしたたかさは、超人の道をゆく姿であった。

〝はたらけどはたらけど猶わが生活（くらし）楽にならざり　ぢっと手をみる〟　―石川啄木―

なのだが、わがくらし楽にならずともどうっちゅうこともなし、といったところのご仁であった。啄木も一目置いてほほ笑んでいることであろう。

冬は書道を教えて過ごすというご仁が私を足止めして、「この言葉だけは覚えていったほうがいい」と次のようなことを言ったのである。

「夫婦のクジ（籤）には外れは無い　当たりクジ（籤）を知らないだけである」

と。それはあるいは、自分自身の体験的メッセージだったのかも知れない。含蓄のある名言である。

かくなる強い印象を受けて別れてからはや二〇年が過ぎた。これほどの印象に残るご仁ではあったが、共時性現象の記録としては、そのひびきの共有が今一つ無かったので

ある。そこでこの記録はパスして次に進めようと考えた。だが、どうしても思い切りよくパスすることができなかった。パスしては思い止どまるという繰り返しが続いて、何でこれほどまでに心を引っ張るのかと、私はじれったく思っていた。私もいいかげんに頭を切り替えるつもりで、図書館に行ったついでに本を三冊借りてきた。それは、平成二〇（二〇〇八）年五月九日であり、翌日にはその一冊に読み耽ったのである。『継続の天才―竹内均』（扶桑社）である。地球物理学者の竹内均先生の自叙伝である。（竹内先生は、平成一六（二〇〇四）年四月二〇日没　享年八三歳）。その五九ページまで読み進めたときのこと、あっと思うや、背筋にエネルギーが昇り上がった。そこの見出しは、一日中タイガー計算機を回し続けた日々とあり、竹内先生が、大学院生時代に研究なされた地球潮汐（ちょうせき）の研究の為に、手動のタイガー計算機を回し続けること四年という歳月について記されていた。月の引力と地球の引き潮と満潮について、学位論文達成までのすさまじい情熱であったが、その研究を支え続けた手動のタイガー計算機に目が走ったとき、一気に二〇年前のあの函館山の、石川啄木の墓前が迫ってきた。そして、死人の魂を助手にして、啄木ゆかりの書画類を売っていた相坂春山というご仁が浮き上がったのである。若い頃、タイガー計算機の修理専門で、北海道一円を駆け巡っていたという

あの話が強烈にひびき上がった。御仁はさらに、いい時も悪いときも人間誰しもあることだ、と言って

「そこの海の潮でも引いたり満ちたり」

とさりげなく言い放った言葉が、今ここで竹内先生の引き潮と満潮の研究の話に同期して浮き上がったのである。

これは一体どういうことか、全くの偶然の話だとするならこれで終幕というものだが、私にはどうしても無関係ではないという霊脈が一瞬の光を放ったのである。亡き方々の魂の出会いが絶対にあり得るのだと思った。

亡き竹内先生の一大論文となった地球潮汐の研究の引き潮と満潮について、それを支えたタイガー計算機は、どうしても、石川啄木墓前のご仁が話すタイガー計算機と、また人生談義の「海の潮でも引いたり満ちたり」という言葉のひびきは激しく共振共鳴しているではないか。

私の心を媒体（メディア）にして、時空なき二〇年の歳月をかけて、亡き霊魂世界の〝生きて通わしている実在〟を必死に伝え続けているとしか考えられない。そればかりか、竹内先生の回し続けたタイガー計算機は、大正一二（一九二三）年に大阪の大本鉄鋼所で開発し

たのであり、発明者の名前から虎印計算機と呼んでいたのを、のちに舶来風にタイガーに変えたという。その虎印に、竹内先生の思いのひびきが私には伝わってくるのだ。

竹内先生が、人生最大の運命的出会いと言われた、旧制大野中学二年生の時の出会い。それは、東京帝国大学の寺田寅彦先生随筆「茶碗の湯」であると言う。寺田寅彦先生と、竹内先生の虎印計算機（タイガー）が、どうしても当然にして、共振共鳴の魂のひびきが鳴り渡っていると思えてならないのだ。

死んで消えたはずの亡き霊魂は、強く思いを寄せる人の命に同化して、見守りの光明を照らしていたと言っては言い過ぎであろうか。そして、函館の石川啄木の墓前の出会いは、ここで終わってはいなかったのである。

亡き魂が生きて輝いているこの話を、いくら考えても思索は延々繰り返すばかりで、脳の世界が混乱していた時のこと、落語か講談でも聴きたいものだと思いつつラジオの番組表を開いて見た。五月一三日夜八時・ＮＨＫラジオ、新・話の泉、立川談志・山藤章二他とあり、ゲストには、競輪王・中野孝二が出ていた。頭のリラックス体操には、こういう番組は実に有効なものである。

そういえば竹内先生は、少年時代から講談の大ファンであって、軽く一席できるほどの熱の入れようであったという。ところが、この番組の終わりにかけて、また来週までの宿題として出されたのは、何とそれは石川啄木の〝はたらけどはたらけど…〟の一句であったのだ。

よりによって、石川啄木の墓がご縁で触発された二〇年前の話から、ひびきを共有できる一連の流れが見えてきた。

啄木墓前のご仁と竹内先生のタイガー計算機の話
人生の引き潮と満ち潮と地球潮汐の引き潮と満ち潮の話
恩師・寺田寅彦先生と竹内先生の虎印計算機（タイガー）の「寅と虎」の話
竹内先生の愛した講談・落語寄席とラジオ番組の寄席と石川啄木の話
竹内先生の本を借りたのは五月九日で、タイガー計算機の話は五九ページであったという話

という文字的に、数字的に暗示する魂の響き、この共振共鳴の話は、まさに〝潮の満ち引き〟にも似て、霊魂のエネルギーは、この現実社会に文字・数・色という魂のひびきとなって、私たちの心を媒体にしてひびかせ、人の心に沁みわたり、この世を運ぶ一大根源力となっている。亡き霊魂エネルギーの一大潮流を感じてならないのである。